就職活動体験記

就職活動の解禁を目前に控えた３年次生に向けて、志望企業に内定が決まった４年次生がアドバイスを寄せた。

迷ったときはまず行動

野口 凜太郎さん（法）　トッパン・フォームズ株式会社内定

私が自分自身の就職活動を振り返って、後輩の皆さんへアドバイスしたいことは「とにかく行動」です。最近、後輩から「就職活動って何から始めたらいいですか？」などの相談を受けることがありますが、いつもこう答えています。

私自身は、３年次の５月ごろから就活を始めました。何から手をつければ良いか分からなかったので、まず専修大学の課題解決型インターンシップに参加。企業のインターンシップでは興味のある企業はできるだけエントリーし、スケジュール調整をして可能な限り参加。３月のエントリーの時にも興味のある企業は全てエントリーしました。

課題解決型インターンシップでは㈱ＫＩＢＩで留学生向け新規事業を担当。そこでは「失敗してもいいからたくさんチャレンジしよう」と主体的な挑戦をさせてもらいました。そのことを就活の面接の学生時代に力を入れたことのエピソードとして話し、内定を10社以上いただきました。

幅広い業界やさまざまな企業にエントリーしたことについては、自己分析ももちろん大事ですし、私自身もしていましたが、エントリーシートを書いたり、インターンシップに参加したり、面接などで企業の方々と話すことで、それまでの自分の考えの盲点に気づかされたり、多面的に見られるようになりました。多くの業界・企業に触れたことで自分の本当に好きなこと・やりたいことを見つけられたように思います。

このように私自身「とにかく行動」して、多くの人の考え方や視点、価値観に触れながら、身をもって経験し、自分の強みや軸をより明確に見つけたことが就活の成功の秘訣だと思っています。皆さんも、迷った時はまず行動してみてほしいと思います。

"自信"と"笑顔"を意識

小川 夏々さん（経済）　クレジットカード会社〈国際ブランド〉内定

就職活動で常に意識していたことは、自分に自信を持つということでした。一緒に働きたいと思ってもらえることが内定獲得につながると考えたからです。

採用に至るまでの間で、企業の方々に自分を知ってもらえる機会はとても少ないと思います。その短い時間の中で、自信のない弱気な人と出会っても一緒に働きたいとは思ってもらえません。私だったら、きらきら自信に満ちあふれている人と一緒に働きたい。そのため、企業の方々と接する時には必ず自信を持って前向きに行動していました。

しかしこれはなかなか難しいことです。私も自信の持てない性格ですが、二つの方法で、面接に臨みました。

一つ目は、その企業で働きたい気持ちは誰にも負けないという自信をつけることです。自分の性格に自信を持つのは難しいとしても、自分の気持ちの強さに自信を持つことで、面接では堂々と話すことができました。

二つ目は、笑顔で話すことです。ありきたりかもしれませんが、緊張している時はすごく難しいと思います。私自身、とても緊張しやすい性格で、面接前は手足が震えてしまうほどでした。しかし、そのような性格だからこそ気がついたことがあります。それは、頑張って笑顔で話すことで緊張がほぐれるということです。

つまり、笑顔でいることは、自信があるように見せてくれるだけではなく、自分を鼓舞してくれる効果もあったのです。面接の最初に笑顔で話すことを意識するだけで、気がつくとリラックスして話すことができていました。

コロナ禍で大変だと思いますが、後輩の皆さんも自分らしく頑張ってください。応援しています。

就職だより

〈４年次生へ〉就職活動継続中の方を対象に、オンラインにより次のセミナーを開催します。

▽「個別相談・求人紹介セミナー」（マイナビとの共催）１月20日（水）

▽「求人紹介セミナー」（ベネッセ iキャリアとの共催）１月26日（火）

皆さんと専修大学の学生の採用に意欲的な企業との、出会いの場となることを期待します。

また、卒業後の進路が決定した皆さんは、キャリア形成支援課に「進路届」を提出してください。

〈３年次生へ〉12月に実施した第２回就職ガイダンス（オンライン配信）は視聴しましたか？

当日見逃した方のために、また重要事項の確認のためにも、ガイダンスの動画の「アーカイブ配信」を行っています。

また、１月25日（月）から４週間にわたり「オンライン企業説明会」が開催されます。参加して、企業採用担当者のお話を詳しく聞いてみてください。

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、プログラム内容に変更が生じる場合があります。あらかじめご了承ください。

懸賞論文・文芸作品コンクール

文芸部門　鳳賞に横山さん

柘植光彦文学賞　三瓶さん

横山萌笑さん

三瓶美鷹さん

学生部主催の懸賞論文・文芸作品コンクールの表彰式が12月8日、生田キャンパスで行われた。文芸作品部門の最高位である鳳賞に横山萌笑さん（文４）が、同部門柘植光彦文学賞に三瓶美鷹さん（人間科学４）が選ばれた。懸賞論文部門は鳳賞の該当者はなかった。

横山さんの『花と犬の季節』は女性の性的被害を軸に、男女の相互理解について描いた。文芸創作の日本文学文化学科・小林恭二ゼミで「物語を練り上げる力が鍛えられた。これからもいろいろなことに関心を持ち、書き続けていきたい」と語った。

柘植賞の三瓶さんの作品は『にじいろの金魚鉢』。性的マイノリティーや非正規雇用などの社会問題を絡ませながら、新宿２丁目のバーで交差するさまざまな人々を取り上げた。社会学科・嶋根克己ゼミで学んだ三瓶さんは「一人一人違う問題を抱えているということを伝えたかった」と話す。

文芸作品部門には20作品の応募があり、10作品が入選。審査委員長の小林文学部教授は「コロナ禍でも将来を見据えた力作が多かった」と講評した。論文部門の応募は５作品で、入選作は３作品。同部門審査委員長の樋口博美人間科学部教授は「社会に対する関心を持ち、追究するパワーを感じた」と述べた。

入選作品集は３月下旬に刊行し、学内で配布の予定。

UIターン知事メッセージ　特別編

ＬＯ活プロジェクト事業責任者　伊藤 悠

地方創生の旗手に

ＬＯ活プロジェクトとは

「地方創生」が叫ばれ、地方での働き手を増やすための各種施策が矢継ぎ早に実施されるようになって早６年。厚生労働省の委託事業として始まった地方人材還流促進事業（Ｌｏｃａｌ×就活プロジェクト、通称ＬＯ活プロジェクト）も立ち上げから６年目を迎えています。

東京圏や大阪圏に集中する学生や若手社会人向けに、地方圏で就職する魅力やノウハウを伝え続けに、毎年１万人程度の登録、回収ベースで年１００人程度の地方圏での就職支援に尽力しています。大学内外において年間２００回を超えるセミナーを実施し、Ｗｅｂサイトや個別相談を通じて自治体の支援制度に接続し、都市圏における地方就職支援のプラットフォームとしての機能を果たしてきました。

東京における地方就職の旗手、専修大学

専修大学とＬＯ活プロジェクトの関わりは深く、例年10回以上のセミナー開催を始め、今年は中止になってしまいましたが、鳳祭でのＵＩターン就職支援コーナーの運営や個別の地方就職相談など、事業開始当初から協働してきました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でイベントが軒並みオンラインに代わる中、11月には１週間にわたるオンライン「実家でくらす、地元で働く」Ｕ・Ｉ・Ｊターン合同説明会を共同で延べ１８４人の参加を集めました。

専修大学は、地方創生が開始される以前から、「日本全国から学生を集め、４年間しっかり教育し、地元を支える人材を多く輩出すること」を目標に掲げ、それを体現されてきました。その影響力は大学内にとどまらず、東京圏の多くの大学の模範となり、地方創生の旗手としての務めを果たしています。

今年度は、ＬＯ活プロジェクトの社会人向けサイト「ＬＯ活-ｔｈｉｎｋ」もオープンし、若手社会人の地方就職にも注力しています。在校生のみならず、卒業生の皆様、保護者の皆様にとっても有益なサービスになるよう、年々サービスを拡充させていきますので、今後もご活用いただければ幸いです。

■■■

ＵＩターン知事メッセージは今号で終わります。

マスコットキャラろーかっちゃん

【ＬＯ活】https://local-syukatsu.mhlw.go.jp/
【E-mail】https://local-syukatsu@os.tempstaff.jp

経営ゼミ連　合同卒論発表会

パワーポイントを用いて発表する田中さん

経営学部ゼミナール連合会（ゼミ連）主催の合同卒論発表会が12月12日、生田キャンパスで行われた。今年度は対面とオンライン合わせて約１００人の４年次生が参加し、８～９人ずつ12会場に分かれて発表した。

テーマは、経営や会計、マーケティング、情報管理など多岐にわたった。コロナ禍で社会に浸透したニューノーマル（新常態）に着目した研究も多く、青木章通ゼミの田中舞さんは「在宅勤務における生産性とワークライフバランスとの両立」について発表。在宅勤務では、上司から部下への心理的な働きかけと目標に対するプロセスの明確化が重要と考察した。

馬場杉夫ゼミの山口拓馬さんは「酒造の海外展開」と題した発表を行い、日本酒を海外市場に浸透させるための方策を広く探った。各発表に熱心に耳を傾けていた３年次生は「プレゼンがうまく、難しい研究内容も理解しやすかった。参考にしたい」と感想を述べた。

各会場から１人ずつ計12人がベストプレゼンター賞に選ばれ、閉会式で賞状が贈られた。関根純経営学部長は「論理的な発表が多く、全体的にレベルが上がっている。コロナの影響でフィールド調査が行えないなど難しさもあると思うが、完成に向けて引き続き頑張ってほしい」と激励した。

ゼミ連の熊澤桃委員長（経営３）は「密を避けるために会場数を増やすなど対策を徹底した。対面での開催を実現できたことで、活気ある発表会になった」と振り返った。